

資本論入門

中

宮本 義男

紀伊國屋書店

■ 著 者： ^{みやもとよし} 宮 本 義 男

1920年大阪市に生まれる。東京商科大学（現一橋大学）卒業。在学中、高島善哉教授の指導を受ける。現在、和歌山大学経済学部教授。

主著訳書：『資本論研究序説』、『資本論研究』、『金融資本への道』、『資本論の論理体系』、『資本論の再生産論体系』、ドップ著『開発と成長の経済学』、『経済原論』（編著）。

住所：和歌山市西高松1-8-20

資 本 論 入 門 中

〈新装版〉

定価 1400 円

1980年12月31日 第1刷発行 ©



発行所 株式会社 紀伊國屋書店

東京都新宿区新宿3の17の7

電 話 (354) 0131 (代表)

振 替 口 座 東 京 9-125575

出版部 東京都千代田区五番町12番地

電 話 (263) 4914-5 (編集)

(263) 9006 (営業)

郵便番号 102

印 刷 加 藤 文 明 社

製 本 三 水 舎

Printed in Japan

落丁・乱丁の際はおとりかえいたします

資本論入門

中

宮本 義男

紀伊國屋書店

目次

第二卷 資本の流通過程

第一篇 資本の姿態変換とその循環

第一章 産業資本の循環と分析の問題意識……………10

(一) 資本循環一般

(二) 問題提起

第二章 貨幣資本の循環……………27

(一) 貨幣資本循環の特殊性——産業資本の価値補填側面——

(二) 単純商品流通と資本の流通過程

(三) 資本の流通過程と一般商品流通との絡みあい、

および資本の流通過程と生産過程との関係

(四) 若干の補足

第三章 生産資本の循環……………三〇

(一) 生産資本循環の特殊性——産業資本の現物補填側面——

(二) 資本の流通過程と一般商品流通の絡みあいの具体化、および資本の再生産過程を媒介する流通過程

(三) 単純再生産と拡大再生産に伴う貨幣蓄藏と予備基金

第四章 商品資本の循環……………三二

(一) 貨幣資本、生産資本および商品資本の循環の相互関係

(二) 商品資本循環の特殊性——産業資本の価値補填と現物補填の統一——

第五章 総括……………三〇

第六章 流通時間……………五四

(一) 問題提起

(二) 生産時間

(三) 流通時間

第七章 流通費……………六六

(一) 問題提起

(二) 純粹の流通費

(i) 購買時間と販売時間

(ii) 簿記

(iii) 貨幣

(iii) 保管費

(iv) 運輸費

第二篇 資本の回転

第八章 固定資本と流動資本

.....六六

(一) 問題提起

(二) 固定資本と流動資本

(三) 資本価値の回転

(四) 固定資本価値の回転の特殊性

第九章 労働期間、生産時間、流通時間が資本の

回転に及ぼす影響.....一〇四

第十章 資本回転が投下資本量（とりわけ遊休資本）

に及ぼす影響.....一一四

第十一章 可變資本の回轉と剰余価値の流通……………二七

(一) 問題提起

(二) 剰余価値年率と可變資本回轉の社会的考察

(三) 剰余価値の流通

第三篇 社会的總資本の再生産と流通

第十二章 緒 論……………二三

(一) これまでの理論的總括

(二) 社会的總資本の再生産過程の理論的内容

第十三章 單純再生産……………二五

(一) 社会的生産の二部門

(二) 兩部門間の取引、 $I(v+m) \parallel IIc$

(三) II部門内部での取引、生活必需品と奢侈品

(四) I部門の不変資本

(五) 理論的總括

(六) 特殊規定

第十四章 蓄積と拡大再生産……………二六

(I) 固定資本の補填

(II) 貨幣材料の再生産

(一) 問題提起

(二) 単純再生産から拡大再生産への移行

(三) 蓄積の表式的叙述

I 第一例 (A) 単純再生産の表式

(B) 拡大された規模での再生産のための出発表式

(C) 拡大再生産表式第二年度目の運動形態

(D) 拡大再生産表式第三年度目の運動形態

II 第二例 「資本主義的生産の生産力が著しく発達している」場合

の拡大再生産表式

第二卷 資本の流通過程

第一篇 資本の姿態変換とその循環

第一章 産業資本の循環と分析の問題意識

(一) 資本循環一般

われわれはさきに「貨幣の資本への転化」を検討したさいに、資本の一般的公式 $G-W-G'$ の G' ($G+g$) の価値増殖の秘密を最後に解く鍵は、資本の生産過程に求められなければならない、と指摘した。われわれがこれまで行なってきた直接的生産過程の分析は、じつはこの秘密の解明にはかならなかったのである。

資本の一般的公式 $G-W-G'$ の価値増殖の秘密が解きたいま、この公式は次のような形式に書き改めらるべきであろう。

$$G-W \underset{A}{\leftarrow} \overset{P_m}{P} \dots P \dots W'(W+w) - G'(G+g)$$

(P_m は生産手段、 A は労働力、 P は生産過程、 W' は剰余価値 w をふくむ新生産物、 G' は増殖された貨幣資本、

—は等価交換にもとづく流通を示し、…は流通の中断と価値の増殖過程を表わす。)

そこでこの書き改められた公式について次の点が注意されねばならない。

(1) この公式は $G-W-G'$ の具体化された公式として、しかも資本がもつ価値増殖の特色を典型的に表わす (G と G' の差額で、それが明確に表現されている) 意味で、資本の一般的な運動公式といえる。

(2) 資本とは運動する価値体のことであり、そしてこの価値体は二つの価値形態、すなわち商品と貨幣をこもこもとりながら価値増殖を行なう。 $G-W \begin{smallmatrix} P_m \\ A \end{smallmatrix} \dots P \dots W' - G'$ の場合にもこのことには

変りはない。ただ G なり W なりは、いまやただの商品や貨幣ではなく、資本価値が宿る姿、態なのである。つまり貨幣や商品の姿をとった資本価値なのである。したがって G から始まって G' に復帰する資本の循環の過程で、資本価値がとるそれぞれの姿、態は、その姿態に応じた資本の特殊な機能を生み出す。 G はもはやたんに貨幣ではなく貨幣資本であり、 P は生産資本、 W' は商品資本となる (G が転化する W は、内容的には公式が示すように P_m と A とに分かれる。この W は生産資本の形態ではあるが生産資本そのものではない。生産資本とは価値増殖過程で機能しつつある資本である。 G に始まって G' に終わる資本にとっては剰余価値をふくむ W' が商品資本であって、最初の G が転化する $W \begin{smallmatrix} P_m \\ A \end{smallmatrix}$ は、

一般商品流通のなから購買された商品ではあるが、この資本にとっては商品資本ではない。それは

この資本によって生産された商品ではないからである。 $W \angle_A P_m$ はすでにのべたように生産資本の形態にすぎない。

産業資本といわれるものは、このような貨幣資本、生産資本、商品資本という三つの特殊な資本形態の統一体なのである。

(3) ところで、さきにわれわれが $G-W-G'$ の具体化された形態として掲げた

$$G-W \angle_A P_m \dots P \dots W'-G'$$

は産業資本の一般的公式であると同時にまた貨幣資本の循環形式でもある。というのは次の意味においてである。

資本価値は順次に G 、 $W \angle_A P_m$ 、 P 、 W' 、 G' の姿態をとっては捨てながら運動する。資本価値の生命をなすものは運動する価値体であって、その運動が停滞することは資本価値としての死を意味する。資本価値は生産過程においても新価値が形成され増殖されるという点で運動しているのであって、価値の運動が停止しているわけではない。

資本価値の本質は、このような絶え間ない運動体であるにもかかわらず、いま資本価値が順次に姿態変換を行ないながら、 G から $W \angle_A P_m$ 、 P から W' 、 W' から G' へと運動するとすれば、例えば G から $W \angle_A P_m$ への転化が行なわれたあとでは、 G が復帰するまで G の個所でしばらく空白がつづくであろう。

同じことはPからW、W'からG'への転化にかんしてもいえる。資本価値が一つの姿態をとるごとに他の姿態は空白となって、それが埋め合わされるためには、資本価値が再び同じ姿態に復帰しなければならぬであろう。

そこで資本価値が同時にG、W^A、P、W'、G'の姿をとっているとすれば、資本価値の運動は断続的ではなく、文字どおり連続的な運動となるであろう。しかしそのためには次の条件が充たされなければならない。

いま資本の一般的公式が一回だけの循環だけではなく、いく回もの循環を繰り返すものとしよう。そうすれば図のような循環形態がえられるであろう。

$$\underbrace{G-W \cdots P \cdots W'-G'}_{\text{循環}} \quad \underbrace{G-W \cdots P \cdots W'-G'}_{\text{循環}} \quad \underbrace{G-W \cdots P}_{\text{循環}} \quad \text{等々}$$

つまり資本の一般的公式を連続して展開してみると、われわれはこのいくつかの循環の連続のなかから、貨幣資本の循環(G $\sim$ G)、生産資本の循環(P $\sim$ P)および商品資本の循環(W' $\sim$ W')を見出すことができる。

産業資本が貨幣資本、生産資本、商品資本の三つの資本の統一体であることはすでにのべたが、いまや産業資本の形態をとる資本価値の運動が断続的ではなく連続的であるためには、貨幣資本、生産資本、商品資本の循環が同時に行なわれていなければならない。

さきの図式で相次いで現われる三つの資本の循環が同時に行なわれている場合にのみ、資本価値はつねに貨幣資本、生産資本、商品資本の形態にとどまり、資本価値の流れは継続的なものになろう。そうだとすれば、 $G-W \begin{smallmatrix} P_m \\ A \end{smallmatrix} \dots P \dots W-G$ という、産業資本の一般的公式は、同時にまた貨幣資本の循環形式でもあったのである。

(二) 問題提起

さて、われわれはこれまで、第一巻で展開した資本の一般的公式 $G-W-G$ を、直接的生産過程の分析を媒介することによって具体化した $G-W \begin{smallmatrix} P_m \\ A \end{smallmatrix} \dots P \dots W-G$ は、価値増殖を典型的に表わすという意味で、資本の一般的公式であるが、同時にまた貨幣資本の循環形式でもあるということ、そして貨幣資本の循環と同時に生産資本および商品資本の循環が行なわれる場合に、資本価値は連続的な運動形態にあると指摘した。

われわれは以下において、三つの資本循環を順次に考察するのだが、そのさいに、三つの問題視点が貫かれねばならない。

第一に、産業資本の循環は、いうまでもなく、資本の生産過程と流通過程の統一体である。われわれはすでに第一巻において「資本の直接的生産過程」を詳細に分析した。だが、資本の流通過程につ

いては、資本の直接的生産過程の分析に必要なかぎりでの、単純商品流通の形態が究明されたにすぎないのであって、資本の生産過程と統一された資本の流通過程、つまり資本の再生産過程の一環として解明されたわけではない。したがって、ここで資本の循環Ⅱ資本の再生産過程の一環としての資本の流通過程の内容が詳細に分析されねばならないであろう。

しかも、資本の流通過程の分析は、たんに資本の一般的公式に沿って一般的に行なわなければならない、貨幣資本、生産資本、商品資本のそれぞれの循環に即して行なわなければならない。なぜなら、産業資本の現実の運動は、この三つの特殊資本が同時に運動を行なうことによって可能なのだから、三つの資本の運動をそれぞれ別個に考察するのではなく、産業資本の真の姿が把握しえないからである。

そればかりではない。資本の循環の一契機としての流通過程は、のちにのべるように、三つの資本の循環ごとに異なった様相を呈するからである。

第二に、われわれは「貨幣または商品流通」の章で、単純な商品の姿態変換にふくまれる二つの矛盾、すなわち、商業恐慌と金融恐慌の可能性についてふれておいた。この二つの矛盾は資本の流通過程において、どのような拡大された形態で展開されるだろうか。

いいかえれば、われわれが $W-G-W$ の単純商品流通の形式において分析したのは、端的にいえば商品価値の実現の問題であった。いまや、この単純商品流通は資本の循環のなかに、資本の流通過程として、生産過程との統一的な形態のもとに止揚されている。したがって、実現の問題は、たんに